

Centimetres

KODAK Color Control Patches

© The Tiffen Company, 2000

Kodak

LICENSED PRODUCT

Black

3/Color

White

Magenta

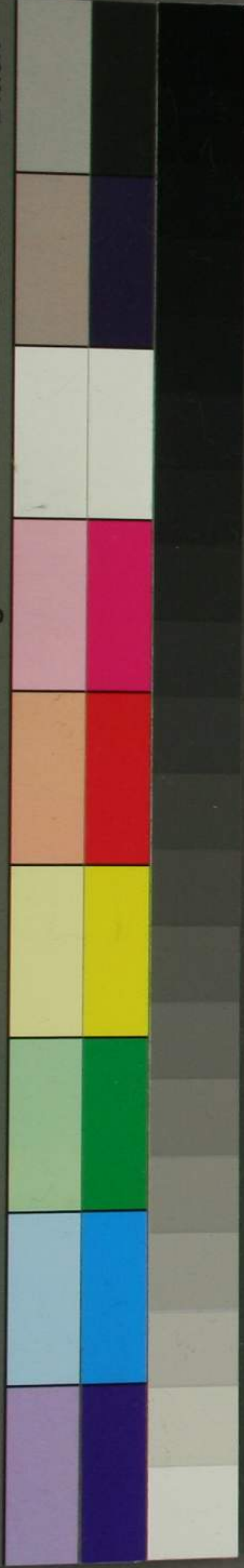
Red

Yellow

Green

Cyan

Blue



月宵鄙物語

五

1799
3
13



門八表18
1799
壽

益流多過の段奉
候然六本舟中八無貸本
其代價を以て代り申候
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解
候に依りて奉願解

古今和歌集
徳川

古今和歌集
我らるるの如くさるるの如く
倭捨山小思目をこて
拾遺和歌集
うきれ本の中ひきまをりつるあれ
久米ののこしひきまをりつるあれ
此巻のこの二巻よりて夕霜が焼の白焼を
あまむまら山女か行て掃りし
葉りて焼を登ひく山をりし
拍岸殿の舞臺より下りてあやまりて久米
の橋の流のふんとせし
管先に伴ひ家を買てあまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし
あまらしをまらし

邦物語卷之四

徳川



孫久吉



剛作母白姥

孝子剛作

巻林和尚

いくそくらなぐさめ

かねんさうらうや

姥持山の宵明の月

月宵鄙物語卷四

姨捨山の姥石

江戸 四方歌垣主人著



其夜去管老まことありて夢の中ありせんやと云より夕霜ゆらぐさく
 見えへれば白蛇のしづりて傍ら離さむべ連がにと母は託けて立出せその後を
 何れも同じ根のこ云道と唯只太郎を羨慕し居れど見えんべさ使も
 めて妹も半は成ぬ若を今懲へりて或時夕霜を引捕へて例の血眼
 成て云やう何条死後ひの蛇一人は隣られて此長ねおぬのつづも卧のさそ
 べと我よを合せく明日のあの老徳を譲り出して野やも山も捨せよ扱
 ろん二之障る雪なれば月をへりてと昔も夫のまゆりも付て姨を控るる女も在
 ければこそ現山の名も降りされ老朽も不用の人拵ることへ唐天空より始
 めるるふとさるるかかとい人の分別より出ることあるべしと請まざる教はと

せどとも我いふ後よせまこと否といふ切も突もすまき面つとてを家壁状
 お責られ責られ流る果るた女もよも為べくやと思ひ旅ゆるそさといと
 いと罪ゆるりされ明は八月十五日の蛇は失はし夫の洋月ありとて仏前よ香花は
 へりて毎年今日といふかかた別作が負もか入して墓消せせけるよ定
 おつけても我子老や衰れ仏の力に一日もやんて床をせ移へしと独言する
 を夕霜へついでよしとてきて若かびと甲斐くじうぶにも我身よとより腰
 尻押とも伴ひとあせんとしと後へ石寺へと誘へば蛇の氣あて日比の老
 ほりたる者や連なりく人目見若くして厭ひらじと何れの間おちやじう
 成るそ我も今年ハ痛く弱りゆれば又みんじの忌日待つらんとも影どか
 くれハ強くも詣てまやわりのは焼爰もいひしぬるとして頃々外きと留守
 跡に盡く夕霜は杖は杖はすさぐて立出が二丁はして早芳れと抄也尻

ちて懸ひ居る。不意に合せしる。教て立より。白蛇の何れぞ
 と云ふ。善を打笑ひて腰二重なる人の。這く徳ひん。踏の
 目暮ぬべし。彼岸の切徳。我嘗て負てふ。せんと云
 も敢て。修負より。里人の目。からしと夕暮。朧して我家へ。忍がせ。已と送
 足。出て走り。千限河を。打債。行。蛇ハ公。付て足。何方へ。連ゆ
 せと云へ。あ。この山寺に。そ。た。そ。あ。ん。せ。ん。と。云。い。ひ。は
 高き山。ま。と。ぐ。と。入。下。身。へ。も。あ。ぬ。岩。の。上。ま。お。し。盡。て。逃。れ。た。
 蛇ハ。あ。れ。と。中。と。又。い。く。も。せ。く。走。退。一。が。答。太。女。の。声。の。蛇。い。よ。く。声
 ぞ。い。ほ。り。ま。く。し。杜。人。の。み。付。と。ん。あ。後。日。の。沙。汰。も。う。る。じ。あ。じ
 じ。殺。え。ん。あ。い。と。て。い。か。れ。刀。を。抜。て。再。び。岩。は。登。え。ん。と。そ。耐。あ。り
 合。る。旗。の。風。は。戦。る。よ。と。ん。く。袋。石。と。ん。お。り。と。記。よ。り。て。此。方

向方を。え。れ。ハ。然。も。棲。た。狼。こ。う。若。を。ガ。カ。と。引。提。る。と。ま。り。り。
 免。を。ゆ。れ。眼。ど。して。は。耳。の。根。ま。で。ひ。れ。唯。一。は。噉。ひ。つ。と。ま。る。蛇。れ
 とも。勝。た。と。癖。者。な。れ。バ。これ。を。お。ま。を。刀。が。り。と。拂。ひ。の。く。る。ふ。これ。は。蛇。を
 ひ。じ。く。尾。上。の。方。も。な。を。合。せ。と。お。ほ。じ。む。ど。なる。狼。と。二。は。ま。り。つ。ら。マ。
 頭。を。並。べ。と。叫。く。れ。も。じ。も。不。敵。の。答。を。と。り。も。そ。あ。ま。り。び。く。旅。て
 刀。を。腕。長。ま。ろ。の。て。打。り。ひ。つ。後。去。下。る。蛇。は。あ。ら。く。逼。り。身。れ。ハ。遠。く。掃。と
 して。迹。ひ。じ。づ。あ。の。老。徳。は。し。や。我。も。あ。り。も。必。定。今。宵。の。中。あ。の。ね。づ。餅
 食。と。り。ぬ。べ。然。る。狼。の。ま。ま。ど。つ。と。ん。も。結。白。ハ。疑。ひ。を。防。ぐ。業。あり
 と。は。海。影。を。海。り。り。叔。又。打。言。の。家。ま。あ。り。て。先。を。折。阿。伽。波。汲。江。蛇。火。蛇
 くる。蟹。の。り。と。に。を。と。ま。あ。り。念。仁。中。て。居。る。か。蟻。蜂。も。声。を。門。を。せ。び
 頃。ま。て。あ。人。の。度。已。影。も。つ。之。海。の。海。の。舟。付。使。て。門。ま。ま。表。よ。出。一。西。二。西

と出立ひし。さへそ言太が家のおまそめつぐれ。夕霜が夜の一ひき。
 此所ゆらと門に詠さうゆふ。祖母ハ人そと。骨をと。祖母と。向ひ居
 て。清く。父まじの。姥を。岩々の。上。小捨。室。今。狼。や。敷。つ。く。人。か。叫。び。が。
 何の。ぐ。き。し。ゆ。打。吉。行。満。を。と。て。何。故。又。妙。世。の。布。ね。ど。さ。る。思。つ。た。山。中。の
 祖母の。何。公。地。と。う。い。ま。と。ん。と。哀。れ。ゆ。ぢ。や。て。尻。成。も。か。く。走。出。て。共。山
 を。さ。し。て。ぞ。分。入。る。此。村。既。日。暮。り。て。此。寂。寞。村。の。後。の。鏡。其。堂。山。と。う。い
 山。う。り。申。秋。の。月。は。昇。り。明。と。と。と。空。の。こ。と。く。空。ふ。花。燗。と。樂。の。音。げ。え。と。
 と。卯。吉。の。祖。母。を。尋。ず。る。公。惑。ひ。不。怪。し。も。ま。つ。と。か。め。の。路。を。り。と。り。て。登。り。あ。れ。柳
 坂。東。の。う。ら。し。編。高。と。國。ハ。此。信。濃。と。て。甲。斐。上。野。も。通。り。登。り。其。後
 越。後。も。り。も。と。る。ぐ。宅。で。り。て。も。る。國。の。中。中。も。文。級。山。の。珠。も。
 と。示。る。れ。バ。月。の。ま。ま。と。に。明。り。けり。夫。の。映。石。と。い。ふ。岩。の。道。の。桂。の。木

の。こ。一。樹。あ。る。の。こ。よ。て。外。木。立。も。り。れ。の。遠。あ。ん。中。ら。杉。の。上。は。ら。か
 ま。り。わ。る。人。の。り。卯。吉。の。祖。母。と。い。ふ。り。の。姥。と。足。の。踏。ふ。も。志。は。け。ま。り。登。り
 て。家。の。恙。も。な。く。て。お。い。た。れ。と。取。進。れ。ば。姥。も。心。氣。け。と。て。ま。こ。り。い。じ。
 あ。か。く。の。物。も。い。そ。ど。泣。居。る。が。中。有。て。い。る。や。我。ハ。悪。者。と。賺。さ。れ。て。世。所。は
 掃。ら。れ。思。く。世。と。て。人。を。も。身。も。恨。ま。り。けり。今。の。間。も。思。合。を。れ。ば。い。つ
 頃。此。桂。の。樹。の。木。魂。は。立。て。家。の。中。の。林。の。在。る。も。ま。ま。に。誤。り。推。取。り。け
 別。他。は。崇。あ。り。せ。を。と。れ。けり。代。り。に。姥。が。命。を。終。へ。と。願。ひ。置。か。思。は。せ。も。今。う。飛
 け。木。産。を。捨。て。れ。の。木。魂。も。我。願。ひ。を。承。け。終。ひ。て。羨。ま。り。けり。終。つ。る。人。え
 と。却。て。ハ。嬉。ま。り。る。ん。然。れ。の。少。し。も。と。毎。う。死。な。が。や。と。願。ひ。を。る。ま。ま。又。何。の
 物。の。お。の。せ。せ。う。形。悪。し。た。更。夜。又。あ。る。小。尋。の。身。つ。ま。を。あ。れ。を。入。ん。と。て。三。つ
 斗。聲。と。る。此。姨。名。の。下。に。狼。の。見。を。伏。す。如。く。押。凝。居。る。を。指。じ。て。先。刺

我へおのゝ小歌をべりく。此世の果報つとて怪死をさぐるも後世の
 かみふの助修へと名号の唱へ居るに。えかよひ芳しれ香のて空よ樂の音
 の空へよれはじ。老の癖耳くと。振仰さて見ゆし。善光寺の方。紫乃雲
 と。な引花すの降しや。わん我目。只物の光る。かりもん。は。か。夫。子。思
 れ。下。根。とも。皆。迹。の。と。彼。下。を。る。と。然。れ。と。染。の。極。獸。の。中。も。狩。み。性
 所。く。宮。頼。母。と。な。な。れ。お。な。れ。は。今。も。又。抱。く。と。や。せ。ん。其。附。い。つ。し。て。其
 方。の。の。と。へ。と。是。は。け。は。し。れ。事。な。れ。は。今。と。お。結。小。も。為。ざ。り。か。憂。小
 付。て。い。さ。ふ。方。も。思。ひ。つ。け。ら。れ。て。藏。悔。の。乃。は。清。る。ぞ。よ。此。方。の。祖。父。の。常。よ。を
 益。殺。生。を。好。て。目。よ。ん。由。る。も。獸。を。さ。を。も。嫌。ひ。ぞ。り。終。い。し。悪。報。や
 て。我。小。も。支。離。す。子。を。産。せ。く。後。よ。こ。そ。道。公。發。し。家。出。は。仕。終。ひ。つ。れ。と。
 從。ま。の。報。う。て。我。も。獸。の。乃。よ。今。宵。命。を。失。ふ。と。責。め。其。方。の。迹。之。り。て。父

割。作。ま。か。く。と。告。ぐ。祖。父。祖。母。の。亡。迹。を。吊。り。そ。の。お。な。を。よ。り。し。れ。は。は。は。と。せ。め
 夕。霜。が。悪。者。お。ら。う。ま。れ。て。剛。作。は。親。し。ま。ね。月。の。終。末。の。不。便。な。れ。は。一。言。の
 い。ら。も。送。ま。や。し。れ。と。藤。が。う。ん。の。不。用。い。と。疾。と。引。立。は。は。打。言。の。お。な
 を。揚。て。泣。は。ら。う。つ。い。ら。や。其。迹。と。と。傳。言。終。父。を。る。は。六。月。の。未
 小。既。又。囚。屋。の。中。に。果。終。ひ。き。然。れ。と。年。年。祖。母。は。知。り。さ。く。歎。う。せ。り。な。と
 兼。と。と。へ。ま。れ。つ。し。今日。を。わ。り。さ。い。母。と。頼。と。つ。る。人。も。今。の。終。ひ。つ。る
 悪。者。よ。ら。う。ま。れ。と。お。な。れ。と。お。な。れ。と。お。な。れ。と。誰。を。後。り。と。せ。ん。
 今。の。祖。母。と。り。り。此。亦。は。岩。の。洞。空。木。の。中。も。董。工。居。て。木。の。實。櫃。の。笑。と
 拾。ひ。く。な。り。さ。も。お。な。れ。と。お。な。れ。と。い。ひ。て。動。き。氣。も。なく。打。伏。く。泣。袖。の。下。より
 流。し。出。る。涙。の。糸。限。の。河。歩。流。り。せ。や。と。い。へ。り。焼。を。此。こ。と。を。笑。と。い。ひ。て
 泣。く。も。泣。れ。ど。お。な。れ。果。こ。居。り。し。が。は。向。の。桂。の。梢。を。然。も。恨。也。と。言。う。打

ひとりていつれ執念木魂うつも。我身を捨てて誰つればよもさふふと
 ひふ人の為も仇われ八月の為めも障る。此指を折てうれ山風のうど
 吹ぬぞと天を仰きて搔け流涙あふ尋の柱も枯果ねべくさるるん世
 路の雁草むの虫いささく月え旁よ志られて恨る人の袖より曇
 みもあらば物の手れ笑ひてはしき根なる夢をまき悲し氣は滞り。
 妹がよひて釘吉次引立命長まの歎の程と知れ。今一度別借が秋
 ぐやとはし形さぬいみ頼ふまきと存命居るや方うく此れ耳に
 笑るる形我如く罪源と者へまき此へは死小おられてと独月もはせ
 るる。さ方ばえ獣の甜食にしていよ少した目をやえん今へ突よじ
 うらぬ身を釈迦牟尼仏ふまきひて我と狼よ投ふてん。其際又疾る
 山を逃れ出よ。世あ人情ある人もはさすしとやまふよと云捨る岩波よ

這出く群がり猛獣の中小身を投入とそれハ孫ハ狂死志と付く
 といひれと幼力あいうでさうさきともいひとく殆りらび濡れど然る間
 遠の谷は小聲して。さほり終るあやしら終るると噂りかくる昔あり
 空細と声あて虫の音も終るやうなれと不思議と妹が耳おやつて煙
 小夜中お仙人ものめじ。狩人などおそ。誰もあれ人魚した折れ待つて
 釘吉が月一ツを頼と預げやと思ひて。そのことをなれ八月も膿あまを
 旁の中お秋のごくさるるの歩むもさ。風は遠くやうあて尾花
 知つて方へ来る。髪髻をの肩近く旅伴ふん失ひ。やそ空よ少り
 耳を友へかきをうてまの衣はさす。其れはさるるの志を海へ
 おまへておまへる。月の毛立文の空の秋風もいよ肌をく打たれあが。其
 人をさる小煙を隔るるやうあてあつるあつらねど別借よんはじつ。かくさるるうらむ

下カ書本



白
を

行
吉

二八
娘
持
山
白
を
身
を
あ
げ
て
悪
無
の
孫
の
外
吉
を
と
り
と
す
る
所



別
作
の
景

備
前
言
卷
之
四

七

けりも亡れて是のいふ事あはれぬかそ捨さうより外吉も是と
 取継りし孫の祖母の袂にすかり孫の袖をとりて有るに諸をよめられ
 けり西の女もあつる物を何れおと見返れハ別世のありし早のうきと
 ともてあておとりの髪を肩に振りけ岩窟に曉つとて顔もよと泣居るに
 実な亡者とさへて月のあか影もよに又まよらば消失やせんと危あて
 死も外吉もいふを言念仏してはりりなる其時亡者秋の蚊の鳴りたる
 声しそあやう一たび死したる若の如きごとて入るもあはれなる事と怪しくもぞく
 けりも思召らんと公若たれば一とらうはへあてせん我既死して冥途におも
 けりともふ忽闇魔の籠にお召れく彼濁の鏡の前に至りたる時我才も犯
 きて目代があまの殺されしをあらじ也。父母を慕ふ者やえんは
 王の宣ふ事。汝正はして罪を親孝の公める者なれば長はして栄ゆべ

を痛ましう死亡父が生前の悪行汝も報ひ終は横たの死を遂よりは
 ども亡父が業因を汝が身おろけらる故と老母が多年苦光の如く信心
 をいじられ徳あつて父が永劫の苦しみはけだ出離しければ横死をも歎く
 べし。總て報ひし現報生報後報也報とて四種ありて現在にその身小
 報かあれは世に孫子も報あり。汝が如くの孝子してかれ無実の罪
 かけをよくせむ天道明らうなりびとや眼をみる今周を一環をこころに
 の移ひて玉の塵をくわひせむ仏の分別業経とや人の文を引く汝も
 中。壁の世お人ありて生涯は意は各業を行ひも命終りて地獄を
 あり。又一生は悪業を行ひ人も死して天上おせらるあり。其のいふ
 りふる阿羅の神智は倍りおれん天の疑ひのふらへことも宜なり是
 これも身先の先世の罪福の因縁に己は熟し。今世の罪福の因縁のいふ

熟せざるがゆゑに。されば若人して不幸お移ひし沈み悪人して善まお栄
 るも因果應報の志がしほむるのこそそれ。終に善悪の報ひるはことほ
 まれをこそ短く傍りて天を私ありと怨む者もあつた。汝は仏世界の田舎
 人うがうけ好の直なるゆゑ疾く宿報する人と思ひぬらふて聊も世お恨ま
 殊に母を孝養せずして先きよけの之歎と死よあくるうら哀れ
 蘇生もよせまよしされど。然て父が罪障消滅の因縁小遠へり。よん
 總六所の時を免て娑婆世界に往りよせ母を孝養の志に遂ませ
 んとぞ。母の死を救ひ魂しひんかまて母を孝養する其功德度大
 且バ汝不日佛法土に生れん其母父母引接せよ。これよるら。今世を行
 の因縁既熟する時とあるべしと告終り終ひて玉の簾忽ち卷下と
 とどく。我のするも測くも計るもあり。扱の母は仕へよとて喚びりりし物と

ここと驚くしていそぐに我の前よまきくひくあり。負榜の布衣さく。夫よあ
 るの越後の國拍子の任人よまきとありて正しく父の名ありられ驚て走り
 走り小其人我を顧く。玉の如くする涙を落し。汝が對て父と名告人も恥じ
 られど。恩徳の情物。方方あるにまよひる。今も炎玉の汝よ生れし
 ごとく。我のけり前殺生とてして。適現報お致され一度道心お起せ。我
 懐の公後不きよと名づの乃小善光寺に常燈を寄附せんして却て是る平
 とし者小其令お賺められ死後の悪念けり前の善業よ感じて終に善田生
 の力を受し。妻が念佛の功力ありて去る五月の末御畜生とて出離して
 今の中有わ吟へり。然れど餘業未盡親の因果の子小報あつらへる世の縁
 よらうのど汝をさへ。冥途の人とあせり。はてらふ。此とゆふ曾平より。見
 て慈悲の長者をも思ひのこころ殺し。これ孫をやく子よ

八えぞりぬまの我亦瓜害のむらうてはめやふ送るると公けの中
 後二三里をうりやまつくと多の河音もへへと都の岐まきり
 月有明山近く入果る東の空あけり比その酒をそそけた軒の境を
 かさおろそとひじく剛健が親行言が債ら離うくと又此が標清て
 べも清らざりたれば友人の又さうに悲しくてももそそ法洗之居り

大采路の橋の埋木

此所の文級の八幡より水内を通る径路とて更での旅人の往ふ方
 めねどしつも犀川の水傍て丹波を山といふ所の波とえわの村を城路へ
 旅人の限りの必此路よりて水内の曲橋といふをこそと昔まきへ物
 曲橋より遠の川下は又都の橋あり南北の截涯多く聳へ橋と水と
 の間九十丈余りある水は紺青のよみて岩切通一渦巻ゆが岩よせり

形その手玉をちりけが如く涌入りて見る者目もや死肝を冷まびといふこと
 其橋といふもろろ丸木とされがら打波して木より新の礎よめり
 せむおろそ是るん知してけし縁久采路の橋をそそ実虫食まどする村
 の折くどく谷川は流入徒らぬ入も先く少くざりたれば旅人などか
 けきも旅らぬるめていふ昔もして危きなり今年も秋の水も丹
 波を山や苗てらんか路のるの鈴音も朗くと明行空よさゆい
 く寝打あびて此路の奥の酒をのらめはりあられらさうりれとさひつ
 追する馬あり鞍の上へ褥打を曲糸といふ物して年の程二八斗を故
 人とともる謙倉風の女房をそそ坂赤田の小坂越して水内を急
 ぐまかり此女房の従者とそそして男女十餘人斗り坂及よ馬は後れ
 馬揃あまれりありさうあやまらまねと小まきと揚ち招きかろる朝露

の後間より白くとも西に付の男に此軒の酒旗を遥よ見しより因を呼ぶしと
 とあきなる酒をのそが朝戸明と呼んで茶藤礮涌さるる間馬よ茶を
 させ盡くともつるやもさる女房の歩も物もおぼろまては付を呼ぶとこの
 癡者酒を吞入くえ之りもせと依の信乳母中の香も濃くお追付ては
 馬のと尋りよは付の男初て公付て狼狽るる様へね体也青馬放まは
 取替あげさる馬放まはる様あげと打拍子とりて追ゆる此馬未此道筋を
 知るざりたれう往べと方へ往びてかの久米路の独木橋をすは渡りはて橋
 の老らぬ境しゆやあつと突くとま留りて在るに従者も見付てゆれはしゆ
 と驚けはに付走の傍りて引戻さんと橋の上二之間おとろふ七丈斗りの
 太木を此方こそは五入か幅のぬれ赤経中く細じて馬の鼻綱とんやう
 するはして虫食る埋木ぬれはゆくとつとつと人馬のまきまはれて折らば

めぐく老のぬれ川水の逆浪さくさくとも清まらまもやとめくと遠度
 ろよそ侍も氣をゆらして誰ゆけ被ゆけととんとんお敷つらて我ゆくとゆふ
 者は女房の馬の上よ在て一目もあしるるが忽ゆるめなやめるもといひは
 鞍壺よぬれ伏く其は流入たれに従者もかごとるるありいよく肝心も失
 て西の又川水とぬじくるりいふあせんとといひあり其付一人の信儀車ま
 中う柳葉倉を出日より行付の傍を離れと拍子まて平らふと顔ひつら
 途の間よてかぬれ赤車のおもゆるも男の運の揺るるまじあがらぬのは付
 急りより起りるるぬれ先をきつをさし殺て後各腹うね切く中紙よせんぬ
 うげんと父の皆むと因らりけ又乳母よひらひてお許達はこれより鎌倉より
 てけいほを殿まきとえ上の血跡をすられよといひ並くやうて口付をきくし
 ばよじとすまひつ不精氣よりやうそれいさきに已が仕出さるるあはれ

仕出さるるごめ馬の桐京の市にて經五や文小買をふるふと云ふるは
 女達の大切がら上落よりも我の程大切なるは侍り夫をこそ好きて去らん
 と何れに遣はらん馬も今の惜るべしが悪事と知りてのよもよもしは竟上
 鶉の心運の拙と故に鍾五貫徒らするさ有る命次も居れんとは候りごと
 さりり上て碎位は泣が傍の奴もて言ふいとせそと皆まうれを乳母本を流
 るふぞくして泣いてとふひや夢も入るとは付を引伏すもぬれは肌押めて腹
 切んとするものありて有る河孫陀仏と同音は唱へたり。此時白蛇の好吉とて
 酒盃の軒は泣麻入はして居るが此声はめとてこれいふ成るぞとあ
 く乳母とて人へあくと請ふ小敷馬とて橋の上とてこればまこと今も馬人
 ともお落しぬとてはなれば蛇もそと南堂河孫陀佛と唱へてあま痛
 ましやぬれを助るもせんともせと此人へおむねひて大死をせしむるを

と云ふもあはれ不斗のひはして張魂の鎌倉武士はひひてははれ独言あへ
 は塞がるるは信ともはなれりて実なる老人の多くのもめひくおよ公は
 ろうなぬもてあめ蛇がたまえやととい合せく刀鞘に納め肌引入る
 白蛇がひらふよりする。あの人助らやうあ。世へ移れと志平は頼むが不
 使ふゆゑのうね此年を旅のゆもあつるゆゑも夢も及がぬはうのしらん
 但し聊もひよりゆのゆのゆが試みるらん。とて女が好吉はあつくあつて
 けがれぬ酒を橋の竿が引抜く。ゆはな垣根の草が一束結付て打つ
 ぢうの橋ののこ走の行を。さなるにうと皆人目を放さどゆりり居れば彼
 を引提て独木橋を這渡りあが。四足を揃へて立居る馬の後脚の間より
 ふうふもそこさして入てお脚の間ははせが困らるるのあひひとて千俵
 は餅を喰はは喰があつる人へ五すり。此馬あを退てゆをばつす踏



大和の樹
 柏葉のう
 あひひの
 信くは平川
 おしの
 落人んと
 きのふ



くらくとまひ出でて汝のしる所至極せりよらんが申直りのひろきんぞとて盃を
 ぞとまれば打ぞうらて返くよれ錯はりて山前方もは得まふお存成ての上の
 もひり登の并の心ぞとらせ終く小室の宿うて街の一の声はしとヨ守させ終
 際もなれ者少てい荷兵弱牽の夫あひ一番小信されて度々都あり登り大
 孫省の元もえくくわれしる信馬樂誦ひして此比の街を少ては
 付むの揺ひらじし小室節と申のささりら己が揺ひ出たるまてこそ
 の嘉辰令月の古代するよりもは着代わよくこそゆわめそとまひひまう
 さんとてしうちも行かたる杖の布衣の信子あはして振立つ既し揺ひ
 出るとまればをそれの奥あつてくくくく下はあ近くてし
 こそれの道とくくくこそまら先今却るのゆと付ともよりてまわはるる強
 りくこそあうるさかりてあるべし。城の懐をへうてきて此男が拍磔及のほそを

せしひまるんせで扱へ我古来の由縁の口方なりと初て知り亡者有縁の
 人付つえといひも扱めて此人のゆあこそと頼母くおひ居るやとあかの
 女房焼を近く扱たよせて給布とゆはゆら皮袋より取りてこれあへ
 ほとととらふ。今日の喜は云はくえんうもなれど。かる旅のなまてん旅し
 とあかむりのゆひいふせん足んこ。おぼのほめあえをる。やうて来春ハ
 かり登るべれば其折辱辱させて今日のまぢびをせんごるを家ハ何下の
 後や。肉の童の孫小こそ。子もも有くと熟小同たれば味涙をさしたて
 さんねぬる事か父一人を扱扱かて居るひが。それあも此後おあれ
 りは姪の若の公さうて。まのふ文級山は掃られけり。これ今の家もあて
 孫と二人吟ひあててこそいと語る女房のさうて。あまを職や映捨八月
 といし里の名この思ひてるもあまあまのしく眺めまつる。さる味ました

而もこそ有られ。いふ母情なれ人ありとも。老人を山に捨んや。やハあると昔物
 語の上をまゝ入らねども。思ひ居つるふ。現小さやうなる女も。わりのりれ。な。そんを。取
 持する。妹が。日比の。佐。も。さ。も。有。ん。と。哀。ま。が。れ。バ。乳。母。中。間。女。ま。で。参。り。て。い
 う。は。い。誠。お。ま。ま。如。く。さ。る。へ。鬼。住。宿。の。今。の。古。里。を。思。ひ。捨。て。柏。崎。へ。あ。り。せ。じ
 い。と。傳。え。た。所。の。さ。う。い。ふ。あ。り。の。妹。ハ。此。詞。よ。ほ。と。て。昔。の。身。の。上。は。へ。入。と。世。に。傳。り
 せ。し。ま。れ。る。ま。ま。の。先。祖。の。面。伏。し。と。思。ひ。出。て。さ。も。り。ひ。出。と。く。の。は。お。じ。の。程
 ハ。有。が。と。れ。と。斯。忌。く。後。身。あ。て。や。と。る。人。ハ。俱。一。番。も。せん。も。使。な。れ。今
 ハ。向。世。と。な。れ。て。吾。老。さ。の。傍。ハ。這。入。斗。の。小。家。つ。り。る。ま。で。朝。夕。佛。ふ
 け。え。て。終。ら。ら。や。と。存。め。し。と。い。ハ。女。房。付。を。よ。ひ。出。て。然。く。申。ひ。て。得。せ。よ。と
 お。や。と。れ。バ。あ。り。て。い。ざ。ら。が。吾。老。さ。ま。で。ひ。出。せ。よ。け。ら。あ。ら。じ。と。さ。ら。と。れ。ま
 る。女。房。ハ。懲。果。ぬ。と。さ。る。ま。バ。其。馬。ハ。妹。を。う。れ。ま。せ。卯。吉。と。も。は。は。馬

小打をせき曲搦へと引出せば。かの口付男より。あひは。出。し。の。妹。君。の。は。袖
 あ。て。の。い。さ。り。も。な。れ。ど。五。五。文。の。馬。が。拾。ひ。上。る。上。お。酒。を。さ。ん。ご。た。う
 ぶ。て。る。喜。び。い。さ。で。淫。ひ。と。や。し。て。は。休。ま。ん。と。て。手。鑑。を。お。振。つ。酒。が。う
 べ。て。終。醉。と。よ。ら。む。ひ。ご。ま。う。て。く。と。舌。を。さ。ら。へ。ん。ハ。休。の。者。も。嗚。呼。は
 きて。お。ま。ま。の。お。ま。ま。の。つ。れ。初。の。數。は。引。え。て。と。ま。ま。を。は。て。そ。群。は。る。

埴科寺の薩金剛

叔母と夕霜と名をたふ。怪されて。公。も。あ。の。祖。母。と。賺。し。出。文。科。山。に。捨。せ
 ら。れ。が。狼。の。噉。れ。と。ん。と。き。て。我。身。を。か。づ。み。と。て。無。勿。俵。罪。は。さ。り。を。も。ま。つ
 る。う。ね。と。後。悔。の。公。を。な。ご。ま。あ。ら。ぬ。と。め。じ。な。れ。家。の。軒。の。月。お。白。の。夜。一。枚
 歌。を。羽。り。し。た。何。地。行。え。ん。夜。より。卯。吉。も。な。り。尋。ね。ば。公。細。く。唯。独。あ。る
 名。を。又。尋。り。て。今。の。我。許。に。移。り。住。ね。と。て。逃。し。ま。も。る。く。連。ひ。く。朝。へ。別。作。

少のまね調子でござんた。正得はして家々賣拵て鉢にさるう。只附の間お
 七は打合々負傷つた。是非今一勝負せんと申す。何れも實種もさぬれが
 為方なり。長老を殺害したり。夜お浄のる。聖柄のし首の夕霜もか
 せと居し。金しを取らして。皆懸の宿より。古物買の翁もきて。これ水
 漬して。捨おらせんと。搦へられ。勝負の庭あり。門出て。役もく。虚々お
 て。福樂は。酒とく。天をて。競ひお。往んて。夕霜。買り。母が。柴之
 へ。浦さん。と。それ。薪も。そ。ろ。け。が。實子。板。皮。を。割。碎。て。焚。り。や。と。そ。ら
 へ。廻。り。ま。る。這。入。の。庭。の。元。隅。よ。て。薪。一。把。え。付。て。長。老。の。掛。は。桂。心。い。い。て。思
 り。ん。う。れ。物。あり。と。云。は。は。折。之。く。刺。鍋。の。湯。浦。お。け。後。う。れ。出。て。あ。る。居
 る。が。顔。り。お。香。氣。の。た。ま。れ。が。お。ひ。ど。お。ひ。て。一。枝。う。り。よ。う。と。ひ。と。く。其。火。と。と
 飛。散。て。香。太。う。回。う。り。じ。め。そ。う。ら。に。ひ。と。お。れ。が。枝。を。投。お。し。て。突。と。ま。る

打振る。い。し。や。う。り。て。袖。袂。お。燃。付。ろ。此。捨。お。る。を。打。こ。お。し。て。薪。よ。て。げ。が
 一。た。は。音。れ。火。よ。り。實。子。天。井。よ。後。ア。て。煙。炎。お。覆。ひ。く。責。た。れ。が。お。け
 れ。答。を。も。た。ま。り。め。を。逃。お。ん。と。せ。う。煙。の。中。お。羊。の。如。き。お。あり。て。角。を。る。と。ぞ
 へ。く。仰。お。あ。が。の。中。お。ま。う。り。落。く。あ。う。か。は。焼。ぬ。夕。霜。の。か。へ。く。香。拵。調。子
 う。る。が。家。ら。ら。火。よ。り。お。る。や。う。り。周。章。は。い。て。履。お。も。と。れ。あ。を。て。お。あ
 る。お。履。を。捨。お。ら。し。て。大。踏。走。り。お。ま。ま。れ。が。近。隣。の。老。も。此。を。あ。て
 辛。ら。じ。て。打。消。つ。扱。善。を。火。引。出。て。え。れ。が。お。猿。く。焼。と。れ。く。尺。長。お。お。け
 居。る。が。友。達。も。お。付。て。茶。を。持。り。て。免。角。の。り。け。目。の。今。一。の。駈。り
 ぞ。れ。ど。目。鼻。ひ。と。り。お。取。と。え。て。只。耳。の。根。ま。で。引。つ。の。さ。ら。う。く。お。お。ま
 赤。鬼。の。如。く。お。う。ら。の。斑。ら。ふ。ふ。れ。あ。が。り。て。帳。幕。の。中。に。お。お。て。近。西。の。人
 探。が。れ。が。お。好。ま。の。夕。霜。の。芽。ぶ。る。ふ。半。跣。は。し。く。て。今。の。途。も。お。お。が。や。お。お。へ

支離しり成なり後のち執念しつねん執好しつこうして付つまゝ人ひとの常じょうもは家の内うちの
 物半ものはんの焼やりしむひるう人ひとの好こう好こうりのと居ゐれは終つひに根ねを以もつて殆たいていに及および大おほ
 この人ひとは窮きゆうすれば悪あく心しんも起おこる物ものなり代しろはして癖くせ者の言ことをなれば又またさうり
 火ひをくここして夕ゆふ霜しもをかきひ云いふ昨日きのう友とも達の語ことばを以もつて填み料りょうの老らう法師ほうし
 檀越だんえつの仏ぶつ供くを以もつて五十ごじゅう友ともの布施ふせを以もつてといふお供くけしむ性しやう
 然しかるがよ我われもさうしてつれを悟おぼさば其その令たまはるべしとて女にの長なが
 老らうを以もつてしるるの火ひ今いま悔くわいと居ゐれば法師ほうしをなぐるんむ好こうも思おもはうとて
 かつり火ひ振ふるり随したがひに只ただふとて目めは火ひをさけて鬼おにの妻つま女に鬼神くわんじんがなる
 いふを和わお洋やうが如ごとく弱じやくくて物ものの身みに立たへさば只ただ我われが心こころをなすにせよと
 引ひきまを以もつて地ち料りょうを以もつて出行しゆつぎたり夕ゆふ霜しもの質しちを以もつてなすれとてさうして逃にげ
 しとて言ことを前まへふまゝく歩あむるが彼あつ寺てらの門かども近ちかくするて何なんのゆゑかゆん

口論くわんを以もつて詰つめて延えんき火ひの音ねのり声こゑあて夫おとこの隙ひまううひて密ひそ法師ほうし通とほる
 女にめゆりとべさうとていふ刀や杖ぼう放はなして切きぶしけ退あひ退ひれ女にを
 汗あせ水みづよりて坂さかを登のぼりお進まじして門かど外がわより既すでに國くにを越こえんとする
 へ退あひ退ひり身みを以もつて警けい言ごんを以もつて度たせ夕ゆふ霜しもの門かど外がわより復またも草履ぞうりを
 まゝひ脱ぬぐ門かどの内うちへ投なげし僧そう達だつ我われを救すくひ終つひに叫なむを音ねを以もつて
 とへ伏ふて氷こおりの如ごとく刀や杖ぼうの胸むねにさしおちやくと押おあて寺てら傍がわを以もつて逃にげ
 のの女に人ひと救すくへとりしと門かど外がわより走はり取とり障さやり女にの書しよ院いんを以もつて逃にげ
 住持ぢゆうぢの老らう僧そうの後のちかかすつ助すけけ終つひに居ゐる居ゐる若わ太たの門かど外がわに在あり
 て今いまの女に疾しやく返へん償じやうされは然しかるがよ房ぼう達だつの身みの上うへより人ひとと怒いつ
 ともはつらば火ひ振ふるり否いな一度いちど門かど内うちへ草履ぞうりを以もつて助すけけよと教しよする
 女に人ひと加か衣い沙さ衣いを以もつて打うちてもえし若わ太たの身みを以もつて捉とめられいふ云いふ由よしは

是じとわらふあそいよく腹をまき傷たみ跡ちりし。やぐて書院お躍より
 位傍を向はは罵り云やういふお法師を人々らふ他妻成りて自己の
 怒物おする中やある此に密法師の我妻お通ふとまき者のおりしを
 申しうお位傍のつらむらじ相争も人よあそそ我を寂寞の昏太といまご知
 らぬらとつらむらに早うもかりごと容あそ。お位傍のつらむらとあむら子ばらま
 てはぐり悪きとるお位傍もつらむらにて精進お戒の聖を罵辱て其世
 焔に惹鬼とつらむらを知らざる非修非学の男ややく去て口業を護
 せよと叱りたる人の行をまえん牛お説法と申し人鳴呼やとてせへられ
 とささうお法師のいさかひよとなやとかりれ女の言太うらひはへる位は一向
 老傍の衣お廻りつきてはあのお者ふはほはれぬが我の一条殺されぬじ
 ぬられぬ慈悲お我命と買取らなりとも此難を救りせ終へと後つと離

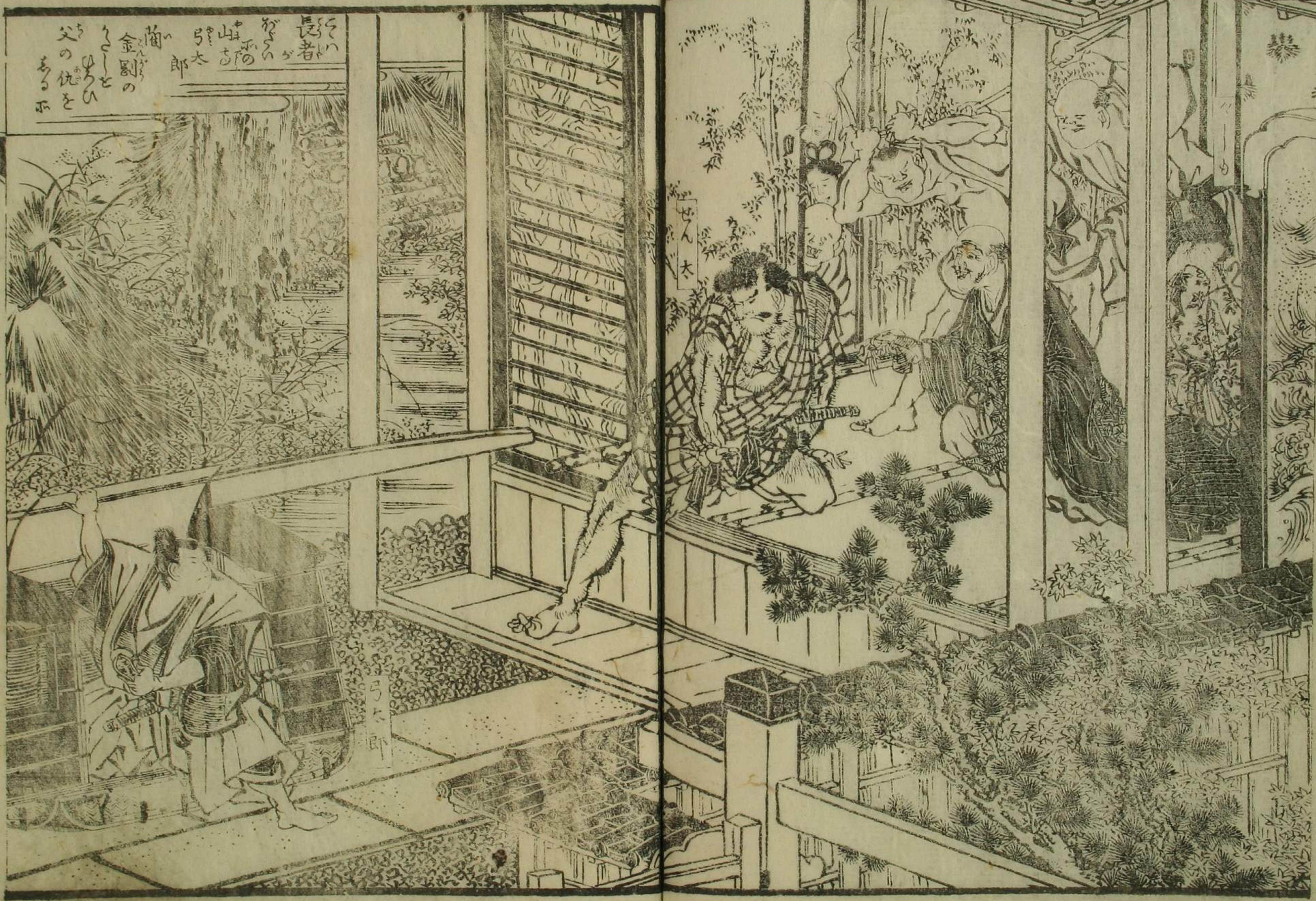
是はハハ位傍らりてやぐて明らうにかうらうとあり形が寺門を強
 ぶられも書使するに必竟此間の信施を目ぐりてのりり言るべけれはは
 拒きて追つらば夜陰に押入強盗りやせん所冷法師とては成宝野に
 ははかたれるんととせひ切てやぐて位傍の入りたる手箱よりおとせんと
 ひく今せう如くなればあのお女のあやまら思傍が今成以あがらんれ
 ばいしてお位傍の居られよじと佐つ。既に位傍の令成派さんとする時じめあり
 門内お昇居て在るお位傍の知るの内より其令成をうらむ暫し付録へ夫
 へとらりてお位傍に尋ねてこととせとせうけてま出る考は伏屋の弓を即し
 さらり比怪お搔破くれら額の疵次第お膿爛とて入若たれは月比の
 人おも達ぐお位傍をりし。今日お父長老の百う日は高りはれは受て
 今日お日せ敵の知れらるて成新墳のあ返く愁歎とてとてく立返

らんとせし初らふ。門前の強かりたれハ暫し控縁居る。加ら内へ履の
 投入く。おびるて。自ら手づり。拵へて。父お履せ。る。而の。苗金剛の。斤
 足。あて。又。斤。足。の。寂。莫。打。の。紐。を。緒。す。げ。る。板。金。剛。の。り。り。の。大。に。擧。げ。て。控
 へ。控。こ。ら。の。根。を。伺。ひ。居。る。に。寂。莫。の。若。太。と。申。て。父。の。雙。言。敵。ハ。拵。め。て。此
 惡。者。の。人。と。心。ひ。定。じ。より。人。目。も。恥。ぞ。ろ。に。ち。生。る。こ。此。肘。弓。を。知。を
 推。柴。漆。の。衣。は。同。く。多。の。上。下。着。て。在。る。が。肩。衣。じ。り。は。お。投。り。け。袴。の。そ
 へ。取。て。か。げ。の。草。履。を。推。方。へ。は。を。め。る。及。も。か。善。を。く。傍。す。す。こ
 者。の。尋。ね。と。さ。り。の。め。り。と。い。ひ。ふ。と。さ。り。ら。此。苗。金。剛。の。出。所。も。是。の。こ。と
 我。の。い。ふ。草。履。あ。て。ん。多。く。も。あ。ら。ね。父。の。履。お。り。次。い。は。して。和。豆。の
 妻。の。履。物。と。さ。り。て。有。る。ぞ。其。は。は。人。と。は。じ。て。同。夕。霜。の。弓。を。射。と。名。告

を。す。より。先。の。り。し。て。老。僧。の。衣。の。下。より。顔。は。し。も。く。打。ん。ず。お。教。か。る。り。し
 額。髪。下。く。ぬ。け。爛。眉。毛。の。け。て。教。の。紫。の。練。ま。ぬ。小。水。を。包。る。り。再。は。し
 腫。さ。る。が。癩。の。如。く。成。た。れ。は。沙。捺。膝。は。あ。れ。て。日。比。の。遊。も。も。あ。を。て
 稱。ま。ふ。さ。へ。入。へ。と。顔。ひ。と。入。ん。と。して。此。金。剛。を。ん。と。物。く。ん。づ。と。こ。の。り
 ぞ。や。長。老。の。履。遠。へ。て。ぬ。り。つ。る。次。それ。と。も。付。て。捨。壺。が。此。間。の。火。の。邊。お
 ち。あ。ら。て。出。る。と。て。ち。ま。は。る。ま。う。に。捨。さ。ら。ひ。て。拵。し。が。又。外。お。ら。へ。れ。物。も
 ろ。り。は。れ。が。有。ま。う。せ。く。斤。足。遠。ひ。も。履。居。る。次。それ。と。ん。お。は。り。く。お
 り。あ。ら。し。人。殺。の。者。探。り。あ。ら。ん。と。て。の。り。お。や。あ。ん。と。ち。あ。胸。裏。と。て。い
 と。教。も。は。し。お。と。さ。る。若。太。の。さ。う。の。思。う。言。も。あ。り。それ。は。の。り。あ。も。あ。り
 ね。同。ご。ら。お。こ。そ。あ。ん。ら。ん。道。に。お。あ。ら。ら。ら。お。ひ。て。有。つ。れ。は。誰。が。捨。り。り。と。も
 こ。と。申。入。て。女。が。取。て。履。し。り。つ。る。な。る。ぞ。い。う。も。お。を。と。さ。る。が。伏。雲。の。家。風。お

長谷川 義光
山崎 大進
金剛 義光
父の仇を
もつ

那由吾卷之四



那由吾卷之四

十二

つと切草履のかじ斗気さすて六借手よ尋する。けくね少年の公
ごにかると空をそめて取合ごその肘弓を郎懐の中より血は流る女
茶履のかじを脱して足はさしつ比寂莫村あて我父の宝剣の隙より入り
て後の鏡技ゆもと取隠し身を放さじて肘前代付か今あめが投合
るに足の履お懸れば寸分も遠ど寂莫打の花春も異緒え外は硬ひ
有べくも足も足をも程あぶに教お空をそめて歩いて先もさるるあまは
あ人いあも今日の如くそがりこと成るる父を欺きて汝が家お清ひ
其る踏よ付伏し書いあせお疑ひは然るべいつて汝が妻の履ひを
正しん父の踏遠へ送るこのめらん斯掲馬を流扱める入の速は兼伏
せよと声を励して詰寄るる霜足を父より頭お激湯をかくるあまは
と。為方なく忍しれい逃まんとしてまの世に膝あひ脚あてり

倒るる弓右郎自次への起しを引とて汝女命とくの本を白状せ
と却らけり矢さへよせと飛くれ若矢く弓の腕をさうと捕へる男
此奴逃とよとほさへなるの者も程杖取のべとけりひのつれて内
男もももさい梅麻杖らう振けとあつ打殺せていわけの若侍らひは
うりほして縛の縄をぞあひおられ若さこの体を入と。られ腕を放
さんとするお程はしつひと放られ有合の箱を押えて弓を郎が
續きまよ打の於たの合浪おれ落る風お乱る山吹の露も一度お散
かぬ。ら若郎の公こそ矢猛よをぬれ病あけけかよつれ入る痲を痛打
て堪へ難くや有らん。さしよまれば小嚙はくを強く振放して躑躅せ
つを嚙切るる眩暈とら伏しやぬ。や所よ若さの太力にうじて擦る
飛下り。おうとあちてじでくる勢いお大勢の者ら。皆こそかろひえ

遊目次つらひて路をゆけけり門外に走坂をひりに遊去り法師の
 小鬼の迹を跡めての追難の豆こそ拾ふれとあはる旋地をひきかき
 夕霜をさへ見え失ひたればおもひまらじらぬ掻く鋒巻くも
 ちまりのけぬ嗚呼がほしくぞ見えよされ其間よりを郎の抱
 てゆふの舟既ふあふが速去りかきて齒がとをひしと司の
 追補を吹くと據へられど悪瘡の疵は破れといふも術なく痛
 びゆふ物搔きかされて空皮伏せへゆりる公のちらの念も
 かれて哀なり「斯く家よりても益く苦痛おほむ目次は結く死入と
 度くならたれど大刀自の薬店に在て大六ふ并せ自の恨
 ぬ間ハ警公の君とも動さざじとつづぬれをり小仙の氣の如く
 ひく大刀自が詞をもむを醫師のりて人走せて速くされハ醫師

も取めを尋りてその根をこるより大とふむる大刀自の
 弓矢即ぬりの病へげとより難治の症の上は破傷風をえ添
 と入く仙家の不充ふ死にぞあはる人間此人の命救ふと
 いたし我家ふ一の奇方あり癩疾癒えりかた子ども命斗
 べし然れども高價の糸判るれ大刀自の許容なくして強
 試みひるんやといふ大刀自もめはあつた苦愛病のあ
 彼奴が肉をそぐとあひて二三両の金も費しもあてん病
 安命斗を取らして永く我家の恥をえん中くお授ひし人交り
 ぞ殺さうふ存命てあへん今死が死ねじ既病刃の許が失
 終る百日のうら星もなれは救ふの命をのぼしれ公も隣
 ハ貧窮神の使者なりとあへて我の醫師あつひの好むは

醫師の腹をまきとえてとちとと瀧が居たり。小仙のこの中うらやまなく
 てお蔭ふまやわらうが不老不死の薬やが今救ひつじと云をさうて哀
 まるまもつと顔にじて日比大刀自の壺をのうらふ掻きかちて人あも見
 せと打とらう物を不老不死の薬なりと傍客どもが云つるふと不斗也
 ひよりいて此際盗とてらを即君よとあせせつやと手拭と教へて中を
 ら壺をの今言ひ明て身を細めて忍び入る壺を探し取て取らま出る
 が公せられて引きたるは令戸の音高く鳴たれば蟻の叫くともせりてさね
 大刀自が地ごと耳よせ付て怪しとて爰おまを遠よるより。小仙の猫も
 睨まれば扇の如く身もさくさくして茶の壺を袖にさし隠しうらう連懐に
 を包こえて盗盗人の壺に入ると金盗ひあり。男どもおあやと鳴りながら
 飛りうて壁をよち拭じお取て仰せし例するが。小仙とるよりうらやまなく

おはして奥手をかかめて目鼻も髪も髪も續うらうてハ茶の壺も取歸す
 を合せ声を上げてゆじと流れて此奴をさうて家内の者ともハまきこむ
 了を便とてさう。傍杖を思れて取障人もせま。さうは子医師えんて
 昔しおも懲りぞか入け。小仙を引退さぬふ溢れ出る茶をさう。國産の
 牛酥なりければ密におまやうけ伏をの先祖ハ牛酥をとりて貢物とせし山
 姥なりとせしが扱ひ其法を傳へ知りて此刀自のさうの酥酪をつくり孫子お
 もられど己独服しければこそ強健めて有るあ。それを仙丹と云ひは病
 者の為ふ盗とつらんと思へばして不使おまをて街に放ちて迹しおまは
 大刀自又醫師お取う。了て盗人の肩持てさう山盗人の。今日も業程の帳
 引てさうの茶をの茶物を賒なう。さうさうさう。故出まこそ傍痛をれい。刺
 て債つきのせんと云はる服を刺しんとこれハ医師仰天しと振拂ひあ

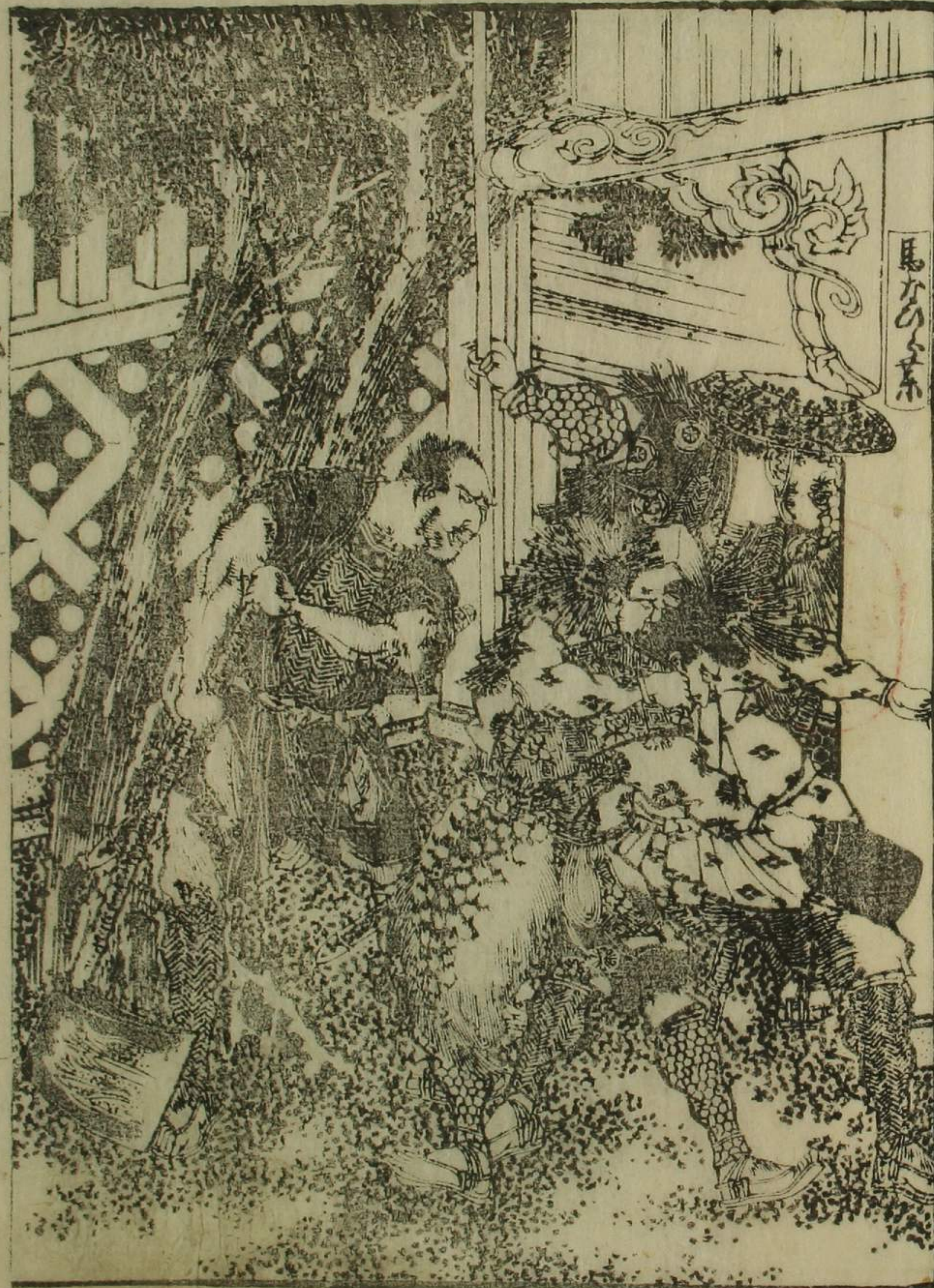
ともえんじして逃出^{にげだ}馬^{うま}おふ人^{ひと}して公付腰^{こうつけこし}の廻^{まわ}りかいさづかぬを穿^く眼^{まなこ}は
 茶^{ちや}店^{てん}を忘^{わす}れ置^おき足^{あし}は此^{こゝ}で皆^{みな}掛^かの古^{ふる}物^{もの}をより買^かりて掛^かよふ付^{つけ}ひるじ
 首^{くび}のりたれば^{らば}債^{ちやう}の形^{かたち}押^おしられぬとさるとさしてさうとまうりて店^{てん}の
 門^{かど}をさし何^{なに}げが既^{すで}に黒^{くろ}刀^{やいば}自^じ店^{てん}のららにぬり^ぬり^りて殺^{ころ}す居^ゐるふ丁^{てい}夜^や目^め
 を入^い合^あせ南^{なん}守^{しゅ}茶^{ちや}師^し助^{すけ}終^{はつ}へといひはる服^{ふく}をじらより引^ひり^り田^{でん}細^こも蝶^{てつ}を
 逃^にげ^が候^{こう}の男^{おとこ}漸^{しだ}く小^こ追^お付^{つけ}て人^{ひと}もこそこれぬと候^{こう}あつうの迹^{あと}終^{はつ}ふと
 やどまれ此^{こゝ}男^{おとこ}あれ作^{つく}の難^{がた}病^{びやう}を合^あせ^せ九^く外^げね醫^い師^しの有^あべ^べと^と例^{れい}の利^りは
 しひりちり扱^あせ^せ台^{たい}太^た此^{こゝ}日^ひ証^{しやう}科^か寺^{てら}少^{すく}十^{じゆ}ふは淋^{りん}たるか^かり^り成^{なり}る^るを
 お妨^{たが}られ割^{わり}へ人^{ひと}殺^{ころ}しの迹^{あと}跡^{あと}を見^み付^{つけ}て^てなれば^{らば}中^{なかつ}か^から^ら憤^いり^りか^かの童^{どう}奴^ぬ今^{いま}宵^よ
 ぶさ^{ぶさ}を失^うりぬ^ぬ此^{こゝ}事^{こと}扱^ありて露^ろ取^とな^なふ人と打^{うち}ち^ちけ^ける古^{ふる}竹^{たけ}打^{うち}も^もに立^たて
 をか^かり^りて伏^ふせ^せか^かり^りて何^{なに}ひ^ひる山^{やま}里^りの^のひ^ひと^とま^ま長^{なが}月^{つき}の初^{はつ}より粟^{あは}

はぐらふ打^{うち}付^{つけ}兩^{りゆう}木^{ぼく}城^{じやう}が糸^{いと}の目^めの音^ね骨^{ほね}は^は多^たりて寒^{さむ}う^うなれば^{らば}長^{なが}者^{もの}う^う汗^{あせ}を
 欠^か六^むを^をじ^じり^りして在^あり^り限^{かぎ}りの男^{おとこ}女^め子^こま^まひ^ひて皆^{みな}寐^ねするに大^{おほ}刀^{やいば}自^じ一人^{ひとり}
 火^ひも^もあ^あら^らぞ^ぞ程^{ほど}々^々帷^ゐ引^ひ合^あせ^せ燧^{たい}の下^{した}に^に在^ある^るが^が文^{ぶん}を^をつ^つて^て兩^{りゆう}風^{かぜ}烈^{れつ}
 く板^い戸^どの隙^{ひま}を^を吹^ふ入^いり^り燈^{とう}灯^{とう}消^けぬ^ぬべく^{べく}打^{うち}ま^まら^らる^る再^{また}合^あせ^せ表^{おもて}の方^{かた}は^は物^{もの}の何^{なに}も
 氣^きのひ^ひて大^{おほ}の夜^よ更^{さら}ら^らしくと^とお^おし^しれ^れば^ば怪^{あや}しく^くて^て其^{その}方^{かた}を^を入^いる^る國^{くに}
 の下^{した}る^る土^{つち}を^をわ^わら^らしくと^とお^おし^して^て人^{ひと}の^の身^みれ^れや^やう^うなる^る物^{もの}の^のは^は出^いで^で此^{こゝ}方^{かた}は^は振^ふり^りや^や
 め^めを^を尋^{たず}常^{じょう}の^の人^{ひと}も^も魂^{たま}消^けて^てな^なも^も立^たつ^つと^と大^{おほ}刀^{やいば}自^じ入^いる^る意^いも^もなく^く燈^{とう}火^か
 を^を掻^かき^きつ^つ眼^{まなこ}を^をさ^さけて^て熟^{じやく}く^くな^なれば^{らば}戸^と尻^{しり}の^の柱^{はしら}を^を探^{たず}り^りて^てぬ^ぬん^んくと
 さら^{さら}なり^りる^る大^{おほ}刀^{やいば}自^じひ^ひつ^つと^と入^いる^るよう^うに^にと^と笑^{わら}て^てけ^けら^らぬ^ぬ盗^{ぬす}人^{びと}の^の身^みの
 長^{なが}さ^さう^うね^ねい^いで^でと^と入^いて^て後^{のち}の^の懲^{ちやう}め^めあ^あせん^んと^とや^やさ^さら^らま^まあ^ある^る足^{あし}り^りと^とか^かめ^めた^た高^{たか}
 る^る物^{もの}あり^りと^と首^{くび}と^と入^いる^るれば^{らば}よ^よた^た物^{もの}も^も有^あり^りと^と取^とり^り上^あげ^げ放^{はな}す^すに^に足^{あし}を^を

戸はありの件の腕をむきとてつらつらに柄も通しとつらつらとて堅奏
 突立つゆり込めてさうさう盗人のうと叫びぬれぬ男を例の小仙ぐさ
 むらうらう。そとこゝろはひびく。念引くたててさう舒きとて誰一人声火合され
 者もなし。大刀自りしつらつらてかばり。雨風潑がりと夜おかく打解くを
 藤のりの盗人の素より。記念せき捕へよと叫ぶれぬ。実より盗人のあま
 と撥馬と潑を。松明よ梅よと叫ぶれぬ。隙小彼盗人の逃はかぐやあひひ
 けん。我と枕火打切とめと火暗しして失われぬ。これをえぬ者吾火を類を
 振く。盗人の肝魂はまふ人あへ笑るる。と怖思れとさうに追々んもせ
 ざりけり。板火照して其腕をえぬに焼爛とさる痕のりて小指一なる
 てこれ。門守大母や噉まらん。といひあうふ。父を即父はけけ。おひ合
 てるゆめれ。苦痛を忍びて立出つる。果して吾をが枕とおぼせられ

あり。つらつらも大刀自り。物語と。祖母のしし入替めて。かくあね。経を
 我の今宵彼奴が。お殺されぬは。我今。祖母の場か。うと恨びんば。
 大刀自り。長老の警敵と。交て討渡。うれい念か。それと痛手負せつら
 と責ての腹かせり。い。て其教の奴が。肉を脛出。して喰が。やと祓ぐ。ひ
 け。う。嫉妬も。よ。お入る。う。ね。我子の。警を。ぶ。わ。く。を。す。れ。と。て。刀。を。ぬ。さ
 と。り。て。さ。う。さ。う。切。碎。さ。や。が。て。さ。う。先。お。つ。ら。ね。と。て。む。さ。く。と。噉。め。を。と。て
 皆一同お思れぬ。り。肘。は。弓。を。即。その。刀。取。り。く。打。く。て。お。ち。ら。れ。云。や。う。
 これ。正。しく。父。の。首。を。て。其。除。ふ。失。り。け。り。の。か。じ。て。爰。小。庚。り。有。て。現。小
 歎の腕。然。し。も。つ。ら。ね。さ。り。ん。世。お。報。ひ。と。い。ふ。物。を。実。より。有。り。と。い。ひ。さ
 沙。袋。が。れ。ば。横。紙。を。破。る。大。刀。自。り。も。さ。る。さ。う。さ。う。と。逃。び。居。る。の。肉。を。食。う
 故。や。これ。より。後。さ。う。さ。う。さ。う。荒。く。お。顔。を。入。入。お。さ。り。ま。に。成。り。れ。ば





馬場の善太

馬場の善太



馬場の善太
腕をう
捨る
ところ

馬場の善太

馬場の善太

ナナ

黒刀自とたふいとてして又鬼婆とぞめど名もわかれかゝるに織の人の心
と清いよりあかき珠のつとくふのる色しとて。

月宵鄙物語 卷四 肆



つとこのよひまりのやうきまのまをりく
月宵鄙物語 未之巻 目錄

第五卷

大儀の虎尼とかりて善光寺小詣れる。小仙が瀧山末
鬼婆浅間山の火焚みとらる。二者とも各々末
海の子。劉作が亡妻母小孝養をそとす。

第六卷

柏寄の家士虎を即嵐宿の古寺あく女の難儀を救ふ。
卯吉白蛇小孝行のふ。香櫃の宿あて欠六鬼王法師小
淑らる。虎を即管太所敷く事。

第七卷

小仙草はあて癩人の為よ秘しめられんとして難儀を遁る。
夕霜嵐のくち小隠まらる。虎を即娘小仙小上り運る。
松山鏡の事。鬼婆牛小むられて台をさす事。

第八卷

長者の万燈貧女の一燈のりりる。即管太を討る。大儀の
禪修尼。善光寺あく。因果抄語のり。吃捨山柱の事。
伏屋布施玉の由来。猫の祠嵐の社の録記。

月宵鄙物語 未之巻 目錄

作者

四方歌垣



重工

柳々居辰齋



備書

石原駒知道

剞劂

田代吉五郎

○四方歌垣主人著述讀本目錄

母樹杜

月宵鄙物語

本末八卷出末

文溪堂版

姪捨山

花晨都物語

全部五卷近刻

同版



花物傳

花物傳

10

